

シンポジウム

ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民
考古学、民族学、文献史学の視点から

発表要旨集



シリア・ラッカ市近郊ユーフラテス川中流域ガーネム・アル・アリ村でのヒツジの放牧

※ 本冊子に掲載されている発表要旨のすべてにつき、
著者の同意を得ずは無断で転載することを禁じます。

シンポジウム

ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民：考古学、民族学、 文献史学の視点から

会場 国士舘大学世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎34号館B棟2階 B205教室

日時 平成24年3月3日(土) 15:00~18:20、4日(日) 9:15~18:00

主催 日本私立学校振興・共済事業団平成23年度学術研究振興資金/国士舘大学助成
研究事業「ユーフラテス河中流域における遊牧社会の発生と展開」(研究代表者：
大沼克彦、研究分担者/協力者：小野 勇、久米正吾、長谷川敦章、赤司千恵)

〈プログラム〉

3月3日(土)

15:00 開場

15:30~15:40 開会の挨拶 大沼克彦(国士舘大学イラク古代文化研究所 教授)

〈ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民〉

15:40~16:10 (質疑応答若干を含む：以下同様)

「モンゴル高原における自然環境と遊牧生活：遊牧民の経験から」

思沁夫(大阪大学グローバル・コラボレーション・センター 准教授)

16:10~16:40

「モンゴル史上の遊牧民と農耕民の相互関係」宮脇淳子(東京外国語大学モンゴル
語科/国士舘大学21世紀アジア学部 非常勤講師(東洋史家・学術博士))

休憩 16:40~16:50

16:50~17:20

「牧畜の本質と特徴：生業構造の民族学的視点から」平田昌弘(帯広畜産大学畜産
科学科 准教授)

〈メソポタミア地域の農耕民と牧畜民〉

17:20~17:50

「Excavations at the Sumerian City of Um Al-Aqarib, Umma Region, South
Iraq」ハイダル オレイビ(国士舘大学大学院グローバル・アジア研究科博士課程)

17:50~18:20

「マルトゥ敵視の背景：Tid(a)num と Yahmadu の対立」

堀岡晴美(国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員)

懇親会 19:00~21:00 (自由参加)

3月4日(日)

9:15 開場

9:30~10:00

「アッカド人とアムル人：古バビロニア時代のアイデンティティの変遷」

川崎康司(早稲田大学文学学術院/人間科学部 非常勤講師)

〈西アジア地域の農耕民と牧畜民〉

10:00~10:30

「シリア中部ビシュリ山系の遊牧化過程：ヨルダン南部ジャフル盆地との照合」

藤井純夫(金沢大学歴史言語文化学系 教授)

10:30~11:00

「西アジア型農耕と家畜の乳利用」 三宅 裕（筑波大学大学院人文社会科学研究所 准教授）

休憩 11:00~11:10

11:10~11:40

「植物遺存体からみた土地利用」 赤司千恵（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）

11:40~12:10

「動物考古学からみた定住村落、移牧、遊牧」 本郷一美（総合研究大学院大学先端科学研究科 准教授）

昼食 12:10~13:00

13:00~13:30

「イランにおける移牧民の考古学」 山内和也（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 地域環境研究室長/国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員）

〈ユーフラテス河中流域の農耕民と牧畜民〉

13:30~14:00

「ユーフラテス川中流域青銅器時代のステップ開発」 西秋良宏（東京大学総合研究博物館 教授）

14:00~14:30

「乾燥地における先史居住民の通時的検討：ユーフラテス川中流域の考古学調査から」 門脇誠二（名古屋大学博物館 助教）

休憩 14:30~14:40

14:40~15:10

「テル型遺跡における居住民の定住・非定住性の検討に向けて：ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に」 長谷川敦章（日本学術振興会 特別研究員（PD））

15:10~15:40

「シリア前期青銅器時代墓地遺跡の被葬者像解明に向けて：ユーフラテス河中流域における農耕民と遊牧民の関係」 久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所 共同研究員）

休憩 15:40~15:50

15:50~16:20

「シリア中部、ビシュリ山麓ケルン墓群の出土遺物から見た牧畜民と遊牧民」 足立拓朗（金沢大学歴史言語文化学系 准教授）

16:20~16:50

「テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の測量調査」 小野 勇（国士舘大学工学部都市ランドスケープ学系）

休憩 16:50~17:00

〈すべての発表に関する質疑応答〉

17:00~18:00 進行 大沼克彦

シンポジウムの趣旨

大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所）

西アジア地方では、コムギ栽培（農耕）とヤギ・ヒツジの飼育（家畜飼育）が開始されたのち、この二つの食糧生産に同時に依拠する定住集落が出現しました。それ以後同地では、急激な乾燥化や湿潤化などの気候変動、あるいは、巨大王朝の崩壊による社会的混乱が継起し、そのなかで、集落規模の縮小化・分散化、集落内種々專業集団の分離と再統合というような適応戦略が選択されたと考えられます。

この考えは、平成17年度から21年度にかけて推進した科学研究費補助金（特定領域研究）「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」がもたらした仮説です。

この仮説の実証に向け、日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金と国土舘大学の助成により、平成22年度以来、「ユーフラテス河中流域における遊牧社会の発生と展開：シリア国ラッカ市周辺の考古学的調査」を推進しています。

ひとくちに農耕といっても、天水農耕、灌漑農耕などの諸形態があり、家畜飼育に関しても、移牧、遊牧、牧畜、酪農など様々な形態が存在します。これらの生業形態は、様々な状況のもとで、様々な相互依存関係を有したと考えられます。

従来の研究では、定住・農耕社会と遊牧社会は二項的に捉えられ、対峙・対立を前提とする議論がなされてきました。しかし、上記特定領域研究と現在推進中の研究の構成メンバーは、農耕社会と遊牧社会が相互に転換可能な、柔軟性ある関係を有したものであったと考えています。

そこで今回、シンポジウム「ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民：考古学、民族学、文献史学の視点から」を開催し、定住・農耕社会と遊牧社会の多様な関係を考察する機会を設けました。

西アジア地方、および、広くユーラシア地方の乾燥地域で考古学、民族学、文献史学の調査・研究を推進されている研究者諸氏・諸先生の発表と討議をとおして、このシンポジウムが研究の深化に大きく貢献すると確信しています。

ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民

モンゴル高原の自然環境と遊牧生活－遊牧民の経験から－

思沁夫（スチンプ）

（大阪大学グローバル・コラボレーション・センター）

私は 1967 年～1975 年まで、内蒙古自治区錫林郭勒盟正 白旗イヘノル(大きな湖) 公社⁽ⁱ⁾チェダム(平坦な原野)生産隊で、祖父(僧侶)と祖母、4 世帯の遊牧民と「五畜」⁽ⁱⁱ⁾と一緒に草原生活を経験した。

私たちが生活する地域は、「善达克沙地」という沙漠地帯である。ここには、植物がほとんど育たない、流動するゴリャン=砂丘と樹や草などに覆われ、半固定的なマンクがあり、草原の植物と沙漠の植物が混合存在し、緑が多く、水も豊富な場所であった。

当時、遊牧民の社会制度、生活環境は激変の時代に直面していた。例えば、遊牧民の従来の社会制度は中国共産党の政治統制によって崩壊し、放牧地(土地)や家畜の所有権は公有化されていた。また、定住化政策が奨励され、放牧地域における漢族移住政策が進められていた。しかし、放牧、五畜の恵みを利用した生活や自然との関係は、従来の習慣と特徴が多く維持されていたと考えられる。

内蒙古自治区のモンゴル語はいくつかの方言に分けられる。私たちが話すことばはチャハル方言⁽ⁱⁱⁱ⁾に分類される。この地域のモンゴル人には、言語・文化の独自性と同時に、ほぼ完全な五畜放牧と独自の自然環境が生んだ自然利用方法が見られた。例えば、モンゴル高原のほとんどの地域では、家畜の頭数増加に並び、五畜の所有を理想としてきたが、実際は、三畜、四畜を組み合わせた放牧が一般的である。また、ゴビや阿拉善沙地などと比べて家畜の頭数が多く、家畜の恵みを利用する形態、方法も多様である。

本発表では、放牧、放牧生活の自然環境との関係性という視点から、放牧の特徴、自然利用方法や自然との関係構築を経験者(大変未熟であるが)という立場から説明し、遊牧民の精神性(信仰、習慣など)にも触れたいと思う。

キーワード：砂漠と草原、五畜、柳、信仰心、井戸、移動

注

(i) 本発表では、当時(1960 年代～1970 年代)の行政組織名称を使う。

(ii) 五畜とは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマとラクダの総称である。

(iii) 内蒙古自治区の「標準モンゴル語」はチャハル方言をベースにしている。

モンゴル史上の遊牧民と農耕民の相互関係

宮脇淳子（東洋史家・学術博士）

1 遊牧騎馬民の誕生とモンゴル草原に連れてこられた農耕民

紀元前 8000 年頃に人類最初の農耕がザグロス山脈で始まり、羊と山羊と牛が家畜化された後、紀元前 1000 年前後に、人が馬に乗り広い草原で家畜を飼う中央ユーラシア草原の遊牧騎馬民が誕生した。

世界最初の歴史書であるヘーロドトス著『ヒストリアイ』（紀元前 5 世紀）と、中国最初の歴史書である司馬遷著『史記』（紀元前 1 世紀）で記された遊牧騎馬民の描写は非常に似ている。

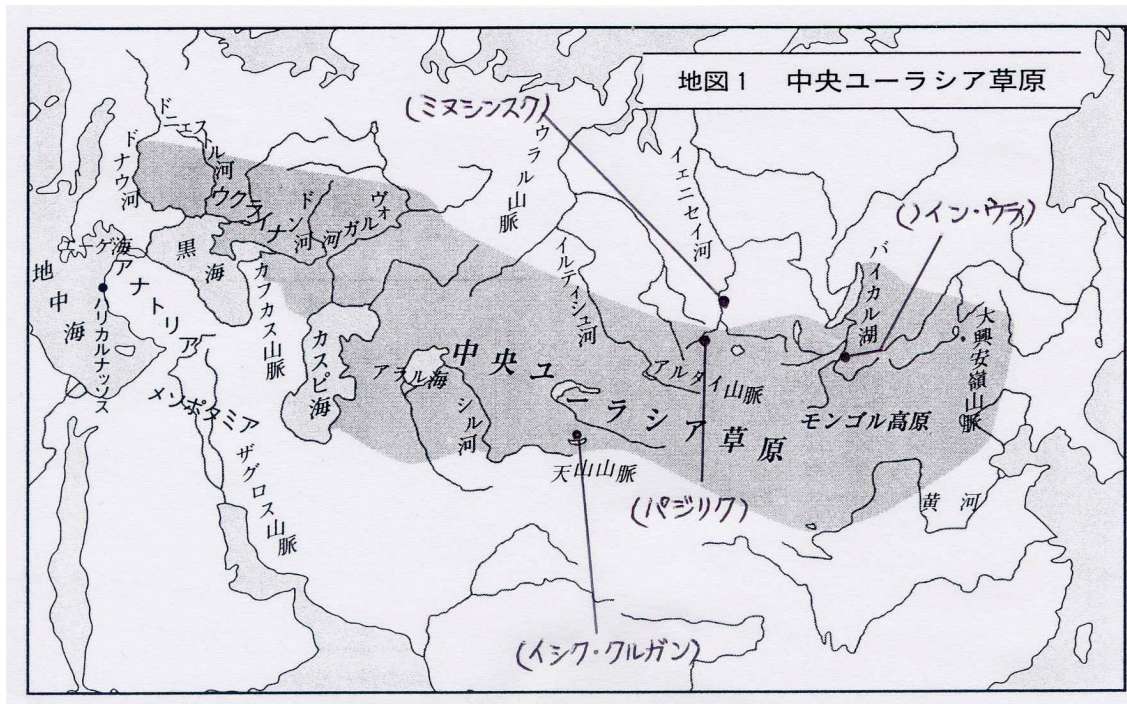
紀元前 221 年の秦の始皇帝の天下統一直後、モンゴル草原に最初の遊牧帝国が誕生した。17 世紀まで、北方の遊牧民は万里の長城の南の農耕民を脅かす存在だった。遊牧騎馬民は穀物を略奪するだけでなく、農耕民を捕虜にして連れ帰り、水の豊かな土地で農耕をさせた痕跡がある。

2 モンゴル帝国時代の遊牧民と農耕民の相互関係

13 世紀に遊牧民が建てた、史上最大最強のモンゴル帝国は、東は日本海から西はロシア草原まで、ユーラシア大陸の大部分を版図に入れた。支配層は草原の遊牧民であったが、被支配層の農耕民は、言語も宗教も生活形態もそのまま、モンゴル人に租税を収めた。遠隔地交易が盛んになり、東西の交流が進み、カラコルムを初めとする草原の大都市は商業センターになった。

3 18 世紀以後、草原に農耕民が入植し続ける

世界規模で人口が増加し始めた 18 世紀以降、降雨量が少なく農業に適していない中央ユーラシア草原に農耕民が入植するようになり、より多くの収入を得るため遊牧領主がこれを助長した。もともと土地は天のものと考えていた遊牧民だが、遊牧地の分断と土地所有の観念が生まれた。



地図出典：宮脇淳子『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』（刀水書房、2002年）

牧畜の本質と特徴 — 生業構造の民族学的視点から —

平田昌弘（帯広畜産大学：masa@obihiro.ac.jp）

1. 牧畜という生業

1-1. 如何に乳をより多く横取りするか【牧畜民の乳利用をせんがための家畜飼養】

- ・牧畜民と生活を共にしていると気がつかされる生業項目：搾乳・乳加工・乳利用
- ・乳製品への依存度：ケニア北東部トゥルカナ牧畜民:61% (Coughenour *et al.*, 1985)、モンゴル遊牧民:48% (石井, 1998)

1-2. 搾乳のための技法【群管理の多くに係る】

- ・搾乳技術、母仔認識と母仔分離、仔畜による催乳、仔畜への哺乳、ヒトの母仔介入、泌乳個体の選別、季節繁殖への対応、繁殖・肥育、育種・選抜、牝個体の更新

1-3. 家畜群のコントロール【家畜を身近に留める技法】

- ・搾乳→母仔分離→仔畜のひとじち→野生動物から家畜／個体管理から群管理への移行（家畜群の成立）

1-4. 牧畜の定義と牧畜論

- ・牧畜の定義：「家畜の群を管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業」
- ・牧畜論：「牧畜社会が牧畜を生業として成立させたもっとも大きな要因は、...（中略）...搾乳であったといえる。家畜化の過程で、乳量の多い家畜を人為淘汰し、その結果牧畜民は、農耕民と地理的に離れ、農耕に適さないより乾燥した土地に適応していった。」(福井, 1987)
- ・牧畜論からの演繹：搾乳・乳利用の開始以前は、農耕に付随した個体管理レベルの単なる家畜飼養

2. 「乳文化圏の一元二極化発達論」仮説

2-1. 乳加工の必要性・不可欠性【保存の必要性】

- ・乳はカッコつきの完全栄養食
- ・家畜は季節繁殖→搾乳の端境期の存在→食品加工の本質は【保存】

2-2. 乳加工体系と乳文化圏

- ・乳加工技術を体系として捉える視点 (梅棹, 1955)
- ・乳加工体系を観る視点：発酵乳系列群、凝固剤使用系列群、加熱濃縮系列群、クリーム分離系列群 (中尾, 1972)
- ・乳文化圏：乳加工技術という文化は、民族の枠組みを越え、ある一定の地理的領域で共有される傾向に

2-3. 搾乳技術の元一起原論

- ・BC7000年紀には乳利用が西アジアで開始（現在のところ最も古い）(Evershed *et al.*, 2008)
- ・母畜は仔畜のみに哺乳を許す【ヒトが横取りすることの難しさ】
- ・非搾乳地帯の存在・搾乳技術はベーリン海峡を超えなかった【搾乳は何処でも発見できる簡単な技術でない】
- ・ミルクという食品の取扱の難しさ【腐り易い】【乳糖不耐症問題】

2-4. 乳文化圏の二極化発達論

- ・ユーラシア大陸において乳文化圏は北方域と南方域とに二極化している【事実】
- ・乳加工体系の詳細な分析→実は、南方域と北方域の乳加工技術には関連性が認められる
 - ・保存の必要性：【西アジア型発酵乳系列群】に発達した段階で西アジアから周辺に（家畜と共に）伝播西アジア型発酵乳系列群：生乳の酸乳化、酸乳の攪拌によるバター加工、バターの加熱によるバターオイル加工【長期保存可】、バターミルクの凝固・脱水によるチーズ加工【長期保存可】の一連の乳加工系列
 - ・北方の冷涼性：冷涼性故に北方独特に乳加工体系が発達
- ・古文書の解読・再現実験による検証：北・東・南アジア共に西アジア型発酵乳系列群に起原していることを示唆

2-5. 民族学的視座からの提起：乳文化研究からの推論

「牧畜の形跡は、BC7000年紀以前のいかなる遺跡からも西アジア以外では認められない」

3. 牧畜の生存戦略と牧畜の柔軟性

3-1. 牧畜の生業戦略

- ・生産活動：家畜個体数の増産、畜産物の生産（乳生産・加工、毛・皮革、食肉、糞）、農耕、狩猟、採集
- ・経済活動：交易（畜産物・農産物と農産物・生活必需品との物々交換、畜産物の売却）、運搬、出稼ぎ
- ・政治活動：地域統治

3-2. 牧畜【外部社会に対して開いた生業】

- ・広域交易の上に牧畜は成り立っている
- ・西アジアの牧畜：農耕活動、および、農耕民との交易の上に成り立っていることが特徴

3-3. 牧畜という生業の柔軟性

- ・技術革新・外部圧力により牧畜の形態は容易に変貌する/させられる【都市生活, 牧畜, 農耕】
- ・政治的圧力で大抵は牧畜側が変貌【優劣関係：都市・農耕民>牧畜民】逆の時代があったのだろうか？
- ・牧畜民は、状況に応じて最善生業戦略をとる
- ・【土地所有の概念が低いからこそ帯びる高い生業の柔軟性】（土地利用の意識は強く持つ）

メソポタミア地域の農耕民と牧畜民

Excavations at the Sumerian City of Um Al-Aqarib, Umma Region, South Iraq

Haider Oraibi
(Doctoral Course of Graduate School of
Globalising Asia, Kokushikan University)

The site of Um al-Aqarib (45.8° in longitude, 31.6° in latitude and 4.5 meters above the sea level) is situated in the semi-desert area, 15 kilometers to the west of the Alrifaiy rural area which belongs to the Thi-Qar governorate. It is 100 kilometers north of the city of Nasiriyah which is approximately 300 kilometers south of Baghdad.

The site was first discovered by two travelers: William Hayes Wards in 1884 and later John Ponit Peeters. In early 1970's, Robert McC. Adams and Hans Nissen gave the site the number 198 after settlement survey in southern Sumer. They drew a map to clarify the location of several sites of the late Early Dynastic period including Um al-Aqarib, but they did not mention the sites of the later Akkadian-Old Babylonian periods.

Local people had given a name Um al-Aqarib to the site after scorpions to be found in large numbers in the site area. This name means "Mother of Scorpions", but we do not know the exact time when the site was so named.

The climate in the site area is characterized by hot, dry summers and cold winters, the difference in temperatures between the two seasons being quite large. The temperature in summer could exceed 50° centigrade (62° centigrade at 12 p. m. on August 5th of 2000, for example), while it reaches lower than 0° during winter.

Numerous pits, made by thieves for illegal diggings, spread all over the site, and these pits have made a serious change of the topography of the site.

Seven seasons of excavations were conducted at this site in 1999 to 2010, and I was responsible for the third and fourth seasons in 2000 and 2001.

The site is covered with sand dunes which hampered us during our attempts to draw a detailed map of the site. During summer the seasonal winds called "Al-Simoom" also affected our excavations.

Excavations at this site were carried out with ten operations which respectively revealed structures as follows:

Operation 1: a big building with some houses including a probable priest house, Operation 2: a wall some 63 meters long probably having surrounded the central part of the holy place, Operation 3: a huge palace-like administration structure, Operation 4: many graves, Operation 5: thin walls and graves most probably of the Early Dynastic III period, Operation 6: structures which represent two temples (Temple H and White Temple), Operation 7: two levels with many buildings and graves most probably of the ED III period, Operation 8: many building structures with a big grave complex at the eastern mound most distant in the eastern part of Um al-Aqarib, Operation 9: a big basin of bitumen, one big kiln, two big storage rooms of grain and many tablets, which altogether suggest administrative functions, and Operation 10: many tablets suggesting one and the same level as the area of Operation 9, both operation areas most probably representing the function as administrative buildings.

MAR.TU 敵視の背景：Tid(a)num と Yahmadu の対立

堀岡晴美（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員）

従来 MAR.TU は「蛮族」とされてきたが、前 3 千年紀メソポタミア南部の行政経済文書に MAR.TU のそのような姿は認められない。G. Buccellati が収集した MAR.TU に言及するウル第 3 王朝（Ur III）期行政経済文書（300 点以上）は家畜・物品の搬入・搬出や食糧支給記録が主体となっており、唯一「戦利品記録」が MAR.TU との戦いを示唆する以外、彼らが南部諸都市と経済的協力関係にあった事は事実である。今日の研究者の多くが MAR.TU を都市文明の対極にある「蛮族」と見なすのは「家を知らず、都市を知らない」「穀物を知らない」「(都市の) 破壊者」などの表現に基づくもので、ネガティブな面を強調する書簡や文学作品は Ur III 期の歴史的事件を題材にしてはいるが、すべて古バビロニア(=OB)期の作品である事に留意すべきである。本報告では、MAR.TU の印象が行政経済文書と文学作品とでは大きく異なるのはなぜか、この問題について考えてみたい。

Ur 王朝に敵対した証拠としては前述の MAR.TU の国からの戦利品記録と Šu-Sin 4 年の年名「MAR.TU の砦『Muriq-Tidnim』を築造した年」が数少ない同時代資料として挙げられる。砦の名称は「Tidnum を遠ざけておく(砦)」を意味するが、Tidnum は MAR.TU の 1 部族に過ぎないにも拘わらずこれまで MAR.TU すべてを排斥するための砦と理解されてきた。だが Šu-Sin の他の碑文では Ur の軍隊が東方(?)へ遠征した際に戦った相手を「MAR.TU の国、(すなわち) Tidnum と Yahmadu(*ià-a-ma-tu*)」と明記しており、当時、行政経済文書から Ur 王室との外交関係を証明できる Yahmadu と、行政経済文書には一切現れない Tid(a)num の 2 部族がいたことは確かである。

Ur 王朝はユーフラテス河中流域都市 Mari の支配者一族と姻戚関係にあった。MAR.TU もまたこの流域に本拠を持ち南部との間を往来していた。時には Mari の役人と行動を共にする事もあり、Ur 王室・Mari・(Syria の) MAR.TU が密接な関係にあった事は明らかである。王朝崩壊後 Mari 出身の Išbi-Erra が Isin 王朝を樹立して先王朝の後継者を名乗り、同じ頃 MAR.TU の首領 Naplanum と同名人物が始祖とされる Larsa 王朝が成立した。この Naplanum の形容語 abu Yamūti が Yahmad の証拠と言われる。書簡が作成された前 18 世紀は、かたや Yahmad 系 Larsa および Mari と関係が深い Isin、他方では Didanu, Ammi-ditana, Samsu-ditana といった Tid(a)num の名が見られる Assyria と Babylon、それに Ešnunna が加わって覇を競い合い、Yahmad と Tid(a)num の対立も深まったと推測される。『シュメールとウルの滅亡哀歌』では MAR.TU ではなく Tid(a)num が侵略者として名が挙がるのも、両者の対立が背景にあるからだろう。MAR.TU の中には南部諸都市と協力関係を築いた部族と、逆に対立した部族がある事を十分認識し、文学作品などで MAR.TU が登場する箇所があればなにかもネガティブ表現と捉える今日の傾向を改めるべきである。

アッカド人とアムル人 古バビロニア時代のアイデンティティの変遷

川崎康司（早稲田大学文学学術院/人間科学部・非常勤講師）

バビロン第1王朝期末（前1640年頃）に発布された『アンミ・ツアドウカの勅令』には、王が「国土（の臣民）」に対して発した徳政令の対象者として「アッカド人であれ、アムル人であれ（*a-na lú ak-ka-di-i ù lú a-mu-ur-ri-i*）」という注記が附されている条項がある^(aa 3, 5, 6, 8, 9)。これは、当時の社会においてもなお、少なくとも為政者側からの領土内の人口認識として「アッカド人」と「アムル人」という2種の臣民の「法的」な区別が存在していたことを示している。他方、この時期に先行する同種の法令『ハンムラビ「法典」』や『サムス・イルナの勅令』などには、そのような区別は見られない。この点から、何故、古バビロニア時代末に至ってこのような区別が使用される必要があったのかという疑念が浮かんでくる。

古バビロニア時代は、約200年間にもわたる列強有力国家間の抗争期を経て、再び統一へと向かう時代である。ひいては、ハンムラビによる「統合支配体制」という施政策などによって、メソポタミア従来の住民が持つ都市への帰属意識、あるいは新来のアムル人が持つ「部族民」意識を、為政者個人への「臣民」意識へと変化させるべく様々な模索がなされた時代であった（cf. 拙稿「ハンムラビによるバビロニア統合支配と経済政策の背景」小倉欣一編『ヨーロッパの分化と統合』太陽出版2004年13-30）。このような歴史認識に立つて、改めて古バビロニア時代の文献資料に「アムル」の用語を追っていくと、初期の「アムル」はウル第三王朝期の「マルトゥ」と同様、西方からの外来の侵入部族への別称（蔑称）としての使用例がある。その後、「アムル」の用語が確認出来るのはほぼ為政者側が用意した官職名（「アムルの長」・「アムルの将軍職」）や称号レベル（「アムルの族長」・「アムルの父」・「アムルの国土の王」）に限定されるものであり、ハンムラビ治世代以前の混乱期にあって、これらは全て極めて政治的な背景から使用されたものと理解される。自らの自称（アイデンティティ）として「アムル」が使用された用例は、現時点でほぼ皆無である。

前2千年紀前半の古代メソポタミア史の展開において、その政治史であれ、あるいは社会経済史であれ、多大な影響をもたらした要因の一つに、アムル人と総称される新たな民族の流入と彼らの政治的台頭があることは今日、研究者の共通認識になっている。しかしながら、アムル系民族は決してメソポタミアの地にあったそれまでの「都市社会（地縁社会）」を排除して、新たな「民族国家」を建国したのではない。彼らはシュメール人やアッカド人が築いた社会に「同化」したのである。そのことに改めて留意すれば、当該の「アムル人」には、その用語が持つもう一つの意味「西方世界」を前提とした「新来の移住民」という解釈が可能であろう。そして、同じく別称をその起源とする「アッカド人」も民族名ではなく、既に同化を果たしたアムル系を含む「都市住民」ほどの意味を持つものであるという解釈を本報告において提案してみたい。

西アジア地域の農耕民と牧畜民

シリア中部ビシュリ山系の遊牧化過程 – ヨルダン南部ジャフル盆地との照合

藤井純夫（金沢大学）

2007年春以来の一連の遺跡調査によって、ビシュリ山系北西麓の遊牧化過程について一定の見通しが得られた。今回の発表では、この見通しとヨルダン南部ジャフル盆地の墓制編年とを照合し、大シリア沙漠（Badiat ash-Sham）の南北両端における遊牧化の動向を展望する。

完新世ビシュリ山系の土地利用は、先土器新石器 A のワディ・アル・ハッジャーナ 1 号遺跡（Wadi al-Hajana 1）にまで遡る。第 3 層検出の半地下式円形遺構 1 件と、その出土遺物（キアム期の石器群）が、それである。この遺跡は、ユーフラテス中流域に点在する同時代集落からの、石器製作を主目的とした、出先キャンプと考えられる。

同遺跡では、先土器新石器時代 B の石器群も表採されている。パルミュラ盆地やエル・コウム盆地など隣接乾燥域の動向から見て、本表採品は先土器新石器時代 B 末の初期遊牧民による、放牧先での石器製作活動の痕跡と想定し得る。ただし、ジャフル盆地のワディ・アブ・トレイハ遺跡（Wadi Abu Tulayha）のような移牧拠点は、まだ確認されていない。

ビシュリ山系におけるより確実な遊牧化の証拠は、後期新石器時代の墓域、ファカット・ビデウィ 1 号遺跡（Fakat Bidewy 1）に認められる。この遺跡で確認された「擬集落（擬住居ケルン墓の横列連結体）」は、ヨルダン南部ジャフル盆地の初期遊牧民墓制とも共通しており、遊牧化が大シリア沙漠の南北両端で同時進行していたことを示唆している。ただし本事例は、ジャフル盆地とは型式の異なる、シリア型の擬集落である。このことは、遊牧化がそれぞれの地域の新石器文化をベースに進行したことを暗示しているであろう。

続く銅石器時代遊牧民の存在は、ファカット・ビデウィ 2, 3 号遺跡（Fakat Bidewy 2, 3）の「擬壁ケルン墓群」によって確認できる。これに続くのが、ジャバル・ガラ遺跡（Jabal Gara'）の K-line である。この両者も、ジャフル盆地の墓制編年と見事に対応している。

青銅器時代以降の動向は、南北で対照的である。ジャフル盆地では前期青銅器時代のケルン墓が多数発見されているのに対して、中期青銅器時代のそれは未確認である。逆にビシュリ山系では、中期青銅器時代になって初めて多数の墓域が出現している。大シリア沙漠南北両端における大型墓域形成の時期差は、本格的遊牧社会成立の時期差を意味しているのかも知れない。

西アジア型農耕と家畜の乳利用

三宅 裕（筑波大学大学院人文社会系）

西アジアに起源した農耕は、ムギ・マメ類を中心とする植物栽培とヒツジ・ヤギ・ウシ・ブタを中心とする家畜飼育が組み合わされたものである。典型的な「混合農業」であり、そこに「農耕（植物栽培）」対「牧畜」という構図は成り立たない。現代でも定住農耕村落において多数の家畜が飼育されており、日帰り放牧という形で牧畜が営まれている。こうした農耕の形を私たちは「西アジア型農耕」と呼んでいるが、その大きな特徴のひとつに家畜の乳を盛んに利用することがある。実際、伝統的に乳利用が盛んにおこなわれてきた地域は、西アジア型農耕が拡散したとみられる地域と見事に重なっており、両者の間にはたいへん緊密な関係があることが理解できる。

ヒツジ・ヤギ・ウシというあまり多産でない動物を飼育する西アジアの牧畜は、肉の生産性という面で構造的な制約を抱えている（西アジアだけというわけではない）。しかし、その乳を利用することができれば生産性が飛躍的に高まることになる。乳利用は西アジア型農耕が広範な地域に拡散していくひとつの原動力になったと思われる。実際、土器の有機物残渣分析や動物骨の性別・年齢構成の検討から、西アジアでは新石器時代にすでに乳利用が始まっていたことが示されるようになってきた。

民族誌を見てみると、乳利用をおこなわない「遊牧民」はほとんど存在しない。例外として一部のトナカイ遊牧民を挙げることができるが、基本的に「遊牧」にとって乳利用は必要不可欠なものと考えられる。乳利用と西アジア型農耕の関係の深さを考えると、「遊牧」もまた西アジア型農耕に出自を持つとみることができる（ヤクやトナカイ遊牧のように、西アジア型農耕との接触によって二次的に成立したと考えられる事例もある）。牧畜への依存度を高めた「遊牧」は牧畜が抱える構造的な問題によりダイレクトに直面するはずで、乳利用は「遊牧」が成立するための前提となると考えられる。

「遊牧」は西アジア型農耕を基盤とし、その中から牧畜への依存度を高めていった生業戦略であると評価することができる。民族誌では遊牧民が農耕（植物栽培）も営む例や世帯の一部だけが遊牧を営む例、定住して農耕民となってしまう例（再び遊牧民となることもある）も報告されている。これは両者の間に厳然とした境界が存在しないことを示しており、環境変化や政治的状況などに柔軟に対応した結果であると言える。また、遊牧民が都市や農耕村落と緊密な関係を保持していることがよく指摘されるが、これも遊牧民の出自に思いを巡らせれば、むしろ当然のこととして理解できるようになる。

「定住農耕（+牧畜）」と「遊牧」はそもそも対立するものとして捉えるべきではない。「遊牧民」という固定的な集団の存在を想定することは、実態を見誤ることにつながる恐れがある。ある時点で「遊牧」という生業を営む集団が存在するだけだと考えなくてはならない。

植物考古学からみた土地利用

赤司千恵（早稲田大学文学研究科博士後期課程）

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス川南岸の細長い河川低地上に立地する、青銅器時代前期に相当する遺跡である。遺跡の後背地は 50m 以上の高い崖になっており、その上にはビシュリ山地に連なる台地が広がっている。河川低地一帯は現在、灌漑によるコムギやソラマメ、綿花などの耕作地が広がっており、本来の植生はほとんど残っていない。台地上は、アカザ科やマメ科などの灌木が点在するステップ地帯となっていて、家畜の放牧地として利用されている。

テル・ガーネム・アル・アリからは、皮性オオムギ、レンズマメ、ブドウなどの栽培植物の炭化種子が出土している。これらの作物の畑がどこに作られていたのかは、畑の遺構が検出されない場合、出土する野生植物から雑草種を特定し、その種類から畑環境を推定する方法がある。原位置で見つかる貯蔵種子に混在する野生植物が、雑草として最も有力な候補である。

一方、ヒツジ、ヤギなどの牧畜も、テル・ガーネム・アル・アリにおける生業の柱の一つであった。植物遺存体の分析からも、牧畜の様相の一部を復元できる場合がある。テル・ガーネム・アル・アリは、降水量 200 ミリを下回る乾燥地帯にあり、燃料となる木が豊富に入手できる環境にはなかったと思われる。そのため、家畜の糞が重要な燃料として使われていた可能性が高い。糞燃料に含まれていた野生植物と、現在の植生分布を考え合わせれば、家畜の放牧地を推定することにもつながる。

テル・ガーネム・アル・アリの場合、貯蔵種子と推定できるコンテキストの土壌サンプルが 1 点採取されている。また、雑草種とは考えにくい野生植物の種子の存在などから、いくつかのサンプルは糞燃料を燃やした残滓と推定できた。さらに、飼料と考えられるアカザ科植物が、集中して含まれるサンプルもあった。畑の具体的な立地の特定には至らなかったが、糞燃料由来の種子の時期的な変遷は、時期が下るにつれて台地上のステップの利用がインテンシブになっていったことを示唆している。

動物考古学からみた定住村落、移牧、遊牧

本郷一美（総合研究大学院大学）

考古遺跡から出土する動物骨の分析から、遺跡における動物利用のさまざまな側面を知ることができる。本発表では、レバント北部の定住農耕集落における動物利用と、レバント南部の乾燥地帯の季節的な遺跡における動物利用を対比させながら、偶蹄類の牧畜の発達と乾燥地域での移牧、遊牧の開始について考察する。

西アジアの定住農耕集落における家畜や野生動物資源の利用に関しては、この 40 年ほど多くの研究がなされており、偶蹄類の家畜化直前の野生動物の利用の状況や、初期の家畜化の過程、さらに農耕牧畜社会の成立について、解明が進んでいる。一方、ヤギ、ヒツジ、ウシの乳利用と乳製品加工技術の発達は従来考えられていたよりさかのぼり、先土器新石器時代末には偶蹄類の乳が利用されていたとする研究結果も提出されている。

家畜飼育と農耕に依存する社会の成立、定住村落周辺での農地と家畜放牧地の競合、という状況を考えると、新石器時代の早い時期に、すでに集落周辺での日帰り放牧と、一定期間家畜を移動させ放牧する移牧とを組み合わせた牧畜の形態は広く行われていたと考えられる。家畜と共に構成員の一部が集落を離れる期間の食料供給を可能にする乳製品加工技術の発達は、このような牧畜形態が発達する前提として必要であり、先土器新石器時代末にはそれを可能とする素地が整ったといえる。さらに、ヨルダンの遺跡から出土する動物遺存体の研究から、この頃にはレバント南部の乾燥地域への家畜を伴った進出が始まっていたことがうかがわれる。しかし、「移牧」「遊牧」を動物遺存体資料から裏付け、論じるのは難しい。「移牧」「遊牧」という言葉がどのような牧畜の形態をさすかの定義があいまいなままに使われることが問題を複雑にしている一方で、とくに「遊牧」に関しては遺跡そのものの痕跡や出土する動物遺存体の量が少ないため、遊牧の始まりについての議論が困難になっている。

イランにおける移牧民の考古学

山内和也（独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所
文化遺産国際協力センター・地域環境研究室長）

イラン北西部に位置するギーラーン州は半乾燥のイラン高原と湿潤なカスピ海南岸地域に挟まれた地域で、気候の点からみれば、地中海性気候といえることができる。このギーラーン州を南から北へ向かい、カスピ海に流れ込んでいるのがセフィードロード川である。

このセフィードロード川の中流域が分布調査の対象地域となった。セフィードロード川中流域の両岸には、キャルーラズ、あるいはマールリークといったよく知られた遺跡のみならず、後期青銅器時代から鉄器時代、あるいはイスラーム時代の数多くの遺跡が分布しているが、その大部分は墓域である。いくつかの遺跡（墓域）においては、過去に学術的な発掘調査が実施されたが、そのほとんどは盗掘され、現在ではその盗掘の痕跡が至るところに観察される。

分布調査では、このような墓域をくまなく踏査し、その立地等を詳細に観察した。その結果、これらの遺跡（墓域）は、地元の人々によって「夏営地」あるいは「冬営地」と呼ばれている地点にあり、また、これらの「夏営地」あるいは「冬営地」は山の斜面に生じた「地滑り斜面」に位置しており、墓域は、おもにその後ろ側の山の斜面に営まれていることが明らかとなった。また、これに基づけば、集落址、あるいは、居住域は墓域の前面、つまり地滑り斜面の平坦部に存在するものと推測される。古代において、「垂直方向の移牧」を行っていた人々が残した痕跡がこうした墓域や集落址であったものと推測される。

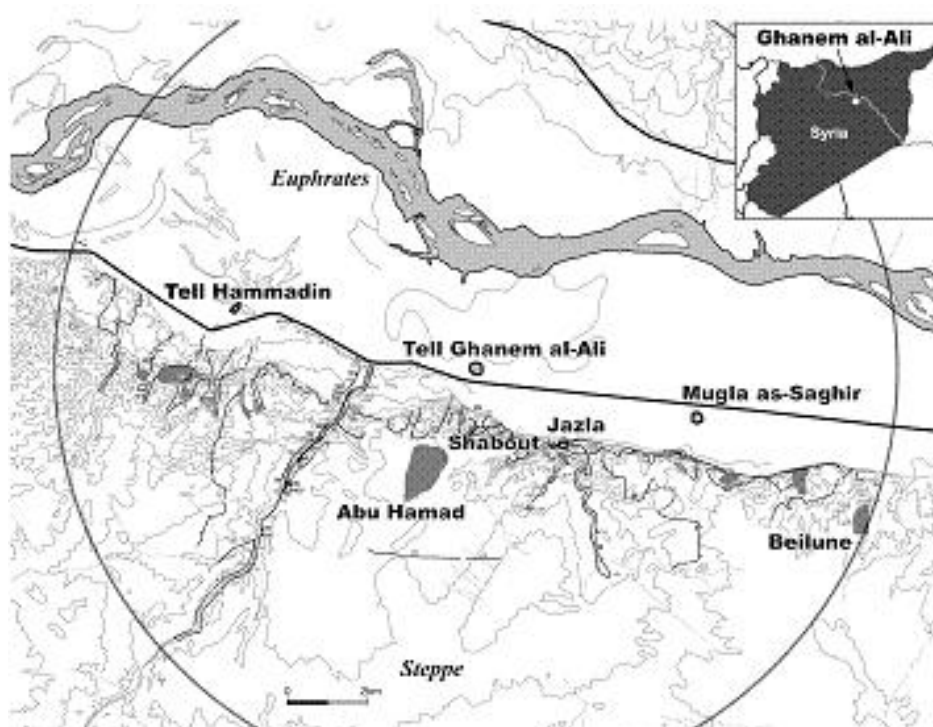
本発表は、イラン北西部に位置するギーラーン州、セフィードロード川西岸で実施された考古遺跡の分布調査の成果に基づき、同地域における古代の墓域、あるいは集落址の在り方や立地を考察することによって、古代において「垂直方向の移牧」を行っていた人々の生活形態や在り方を明らかにしようという試みである。また、あわせて、もともとは森林に覆われていた同地域が、人間の介入によって、いかにして現在見られるような、樹木が少ない景観に変化してしまったのか、つまり、現在観察されるいわゆる「文化的景観」がどのようにして出現したのかという点にも触れるつもりである。さらには、その生活形態あるいは移動形態から想定される文化接触、文化伝播の在り方についても言及する。

ユーフラテス河中流域の農耕民と牧畜民

ユーフラテス川中流域青銅器時代のステップ開発

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

西アジアにおける青銅器時代は遊牧によるステップ開発が本格化した時期とされる。このプロセスを調べるために、シリア領ユーフラテス川中流域において 2008 年以來 5 シーズン、遺跡分布調査を実施した。踏査域はユーフラテス低地と内陸ステップの接点にある青銅器時代遺跡、ガーネム・アル＝アリから半径 10 キロ圏である。見つかった遺跡の時期は多岐にわたるが、特に詳細に調べたのは前 3 千年紀から 2 千年紀にかけての遺跡群である。結果を分析してみると、前 3 千年紀の当地の集団は、(1)半農半遊牧の生業をいとなんでいたこと、(2)部族社会であったこと、(3)部族の紐帯をになう「聖地」を有していたらしいこと、(4)前 3 千年紀末から占拠地が内陸ステップに向かったこと、などが推察された。この発表では、そのように考えられる根拠を整理するとともに、上述の(4)、すなわちステップ開発が本格化した時期についてさらなる考察を加える。鍵となるのは、国士舘大学が発掘を進めたガーネム・アル＝アリ遺跡出土青銅器時代石器群の層位的変化、および、筆者等の踏査によって内陸ステップで見つかった唯一の居住遺跡であるジャズラ遺跡である。前者は、ステップ地帯で広範に見つかる石器散布地（＝遊牧民ないし牧民の短期逗留地）を年代付けする根拠となる。また、後者、ジャズラ遺跡は内陸展開した集団の生業についての手がかりも提供する。これらをもとに、前 3 千年紀から 2 千年紀にかけてのユーフラテス川中流域ステップ開発のプロセスを素描したい。



遺跡分布踏査を実施した地区

乾燥地における先史居住民の通時的検討：ユーフラテス川中流域の考古学調査から

門脇誠二（名古屋大学博物館）

定住・農耕社会と遊牧社会という概念は、古代西アジアにおける墓地の考古学的解釈にも影響をおよぼしている。例えば、ユーフラテス川中流域に数多く分布する青銅器時代墓地の存在は以前から知られているが、その中には「集落外墓地（extramural cemetery）」と呼ばれ、集落との対応が不明確な墓地が含まれる。これらの墓地は河岸段丘上あるいはその直下に立地しており、分布には粗密があるが、多いところでは百～千単位の墓が集中する場所もある。このように大規模な墓地の場合、そこから数kmの河川低地に集落があったとしても、集落民の墓地としては大きすぎるという解釈がある。

本発表では、この集落外墓地の理解を深める考古学的記録について紹介する。このデータは、シリア、ラッカ市東方のユーフラテス川中流域において2008年～2011年にかけて行った5回の遺跡踏査（代表：西秋良宏 東京大学教授）によって得られたものである。踏査では、集落外墓地の分布状況だけでなく、旧石器時代から青銅器時代までの遺跡や遺物散布地点の記録を行った。その後、収集された遺物の時代判定や遺物の文化的・行動的背景に関する研究を進めている。その結果、前期青銅器時代には調査範囲内において、3つのテル型集落（ハマディーン、ガーネム・アル＝アリ、ムグラ・アッザギール）が河川低地に立地し、その周辺の河岸段丘上に同時代の墓地や活動場が集中する傾向が認められた。また、墓地の集中域のあいだには墓の空白地帯が存在しているようにみえる。こうした遺跡分布状況に対する説明として、河川低地と乾燥台地という異なる環境それぞれに適応した異なる集団（いわゆる農耕民と遊牧民）が存在したのではなく、河川低地と乾燥台地の両方を居住・活動域とした集団が複数存在した、という方がより適当だと考えられる。

本発表では、こうした青銅器時代の考古学的解釈の妥当性をさらに検討するため、それ以前の時代（旧石器時代～銅器時代）の遺跡分布状況を概観する。特に、前期青銅器時代の遺跡空白地帯であるワディ・ハラル流域に着目すると、この場所には旧石器時代から新石器時代までの遺跡が多く残されている。そのため、青銅器時代の遺跡空白域は、少なくとも遺跡破壊あるいは活動不可能な立地が要因ではないと指摘される。水源や移動ルートとしてのワディの経済的有用性を考慮すると、この近隣に青銅器時代の遺跡が希薄であることが問題として指摘される。

テル型遺跡における居住民の定住性・非定住性の検討に向けて ユーフラテス河中流域テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の成果を中心に

長谷川敦章（日本学術振興会特別研究員）

紀元前 3 千年紀後半以降のメソポタミアの楔形文字文書資料には、ビシュリ山付近のシリア砂漠外縁を故地とする遊牧民集団の一般名称としてアムル人が頻繁に言及されている。アムル人諸集団は、ウル第 3 王朝滅亡の一因となったことが端的に示しているように、メソポタミアに幾度となく訪れる暴力的侵入者として記述されている。

しかし、遊牧民と定住民の関係が単純な二項対立としてとらえられないことは、多くの研究者が指摘している通りである。当然ながら、牧畜活動を取りあげても季節的に長距離を移動するいわゆる遊牧から、1 日で集落近辺を放牧してくるものなど多様性がある。テル型遺跡の居住民がどの程度の定住性を有していたのかを検討することは、生業における遊牧的な要素の度合いに密接に関係してくると思われる。

ユーフラテス中流域に位置するテル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、紀元前 3 千年紀を中心に栄えた集落である。遺跡の南方にはビシュリ山から続くステップ台地が広がり、その縁辺部には同時期のアブ・ハマド遺跡やワディ・ダバ墓域などの墓地遺跡があり、シャフト墓等が造営されている。この集落遺跡は、紀元前 3 千年紀末期には廃絶し、その後は土壇墓造営などの小規模な利用のみにとどまり、再び集落が営まれることはなかった。続く紀元前 2 千年紀に入ると、台地の上で数多くのケルン墓が確認されており、人々の活動の舞台が乾燥地域へ拡大していった様子がうかがえる。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡では、遺跡北東部から北西部にかけて、表面観察で確認できる遺構群を測量調査した。それらの成果や、第 1 発掘区の調査結果を踏まえると、この遺跡の住居址は、基本的に方形を呈し、複室構造を有することが特徴として上げられる。また、2010 年度の調査では、新たに遺跡北西部に第 7、8 発掘区を設け調査を継続した。第 7 発掘区では、合計 5 基の円形焼成遺構が検出されている。そのうち 4 基は密集している。いずれも直径約 70 cm の円形であり、炭化物と灰からなる覆土の下からは、こぶし大の礫が敷き詰めており、一部には石臼が再利用されていた。また、第 8 発掘区では、80 cm 大の矩形の石膏槽が 3 基検出された。2010 年の調査の新たな成果も踏まえ、これらの遺構の性格から、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡における定住性・非定住性をどの程度検討することが可能であるかについて考えてみたい。

シリア前期青銅器時代墓地遺跡の被葬者像解明に向けて：ユーフラテス河中流域における農耕民と遊牧民の関係

久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員）

シリア、ユーフラテス河中流域に位置するテル・ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊において、前期青銅器時代墓地遺跡の調査が 2008 年より日本-シリアとの共同調査で実施されている。数千基規模と想定されるその大規模な墓地遺跡は、1990 年代にドイツ・シリア共同調査隊によってアブ・ハマド墓地遺跡として一部調査され、その大規模さゆえにユーフラテス河畔のテル型集落に居住する農耕民ではなく、ビシュリ台地上を利用した遊牧民の墓地との見解が示されてきた。一方、日本-シリアの共同調査の成果は、ユーフラテス河畔のテル型遺跡と台地上の墓地遺跡とが互いに緊密な相関関係にあることを示している。すなわち、この結果は墓地の被葬者がテル型集落民であった可能性を示唆する。

墓地の被葬者が河畔の農耕民か、それとも台地の遊牧民か、という一見シンプルな疑問は実は、前・中期青銅器時代のユーフラテス河中流域の政治構造と生業経済の多様性を探る上で本質的な議論である。なぜなら、中心的政治機構の管理下にはなかったと思われる各集落の自律性や部族社会的傾向など当時のユーフラテス中流域の社会組織復元に迫るためには、まず明確にしておかねばならない根幹の議論と密接に関連しているからである。

そこで本発表ではまず、前・中期青銅器時代ユーフラテス河中流域における農耕民と遊牧民の関係について、その学説史的検討を行うことによって本発表の議論を整理する。続いて、発表者が発掘を担当したガーネム・アル＝アリ遺跡近郊墓地の調査成果を提示した上で、ユーフラテス河中流域のセトルメント・パターンや人口動向の分析を通じて、ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊墓地が、果たして直近集落と比較して大規模すぎるかという観点から、墓地の被葬者像について明らかにすることを試みる。さらに、生態環境の異なる他地域とユーフラテス河中流域のセトルメント・パターンの比較を通じて、前・中期青銅器時代ユーフラテス河中流域における農耕民と遊牧民の関係の特徴について論じる。

シリア中部・ビシュリ山麓ケルン墓群の出土遺物から見た牧畜民と遊牧民

足立拓朗（金沢大学）

平成 17 年度発足特定領域研究「セム系部族社会の形成-ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究-」（研究代表者：大沼克彦、国士舘大学教授）では、ビシュリ山系北麓に分布する青銅器時代ケルン墓群の調査を行った。その結果、1) この地域のケルン墓群は、中期青銅器時代前半の数百年間に短期的かつ集中的に造営されたこと、2) それらは 3 時期に区分できること、3) 大型の遊牧集団が関わっていたこと、などの所見を得ることができた。

青銅器時代中期前半という年代観は、ヘダージェ 1=ケルン墓群 9 号墓出土の青銅製トグル・ピン（足立 2008）、トール・ラフーム 1=ケルン墓群 131 号墓出土の青銅製短剣（足立・藤井 2010c）の比較型式学的な研究から得られた。また、ヘダージェ=ケルン墓群とトール・ラフーム=ケルン墓群から出土した貝製品（足立・藤井 2009）、石製・ファイアンス製ビーズ（足立・藤井 2010a）、ファイアンス製鳥形ビーズ（足立・藤井 2010b）の型式学的分析でも、同様な年代的な裏付けを得ている。

本発表では、ケルン墓群出土の土器の型式学的研究から、さらに年代観を補強していく。そして、ビシュリ山地の周囲に位置する青銅器時代中期の拠点遺跡である、テル・ハリリ遺跡（古代名マリ）、テル・ビア遺跡（古代名トゥトゥル）、テル・ミシュリフェ遺跡（古代名カトナ）などの出土遺物と比較しながら、ビシュリ山系ケルン墓群の被葬者像を追跡したい。これまでは、漠然とマルトゥ、アムッルなどを念頭に置いてきたが、今後は文献資料の研究成果を援用しながら、より精密な考察をしていかなければならない。本発表をその嚆矢としたい。

引用・参考文献

- 足立拓朗 2008 「ヘダージェ 1=ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』11号 7-13頁。
- 足立拓朗・藤井純夫 2009 「ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の貝製品の年代について」『Newsletter セム系部族社会の形成』No.15 1-6頁。
- 足立拓朗・藤井純夫 2010a 「東シリア、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の石製・ファイアンス製ビーズの年代について」『オリエント』52巻2号 93-107頁。
- 足立拓朗・藤井純夫 2010b 「シリア中部、ビシュリ山系北麓ワディ・ヘダージェ 1=ケルン墓群出土のファイアンス製鳥形護符の年代について」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』24巻 109-119頁。
- 足立拓朗・藤井純夫 2010c 「シリア中部、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の青銅製短剣の年代について」『西アジア考古学』11号 119-127頁。

テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡周辺の測量調査

小野 勇（国士舘大学理工学部都市ランドスケープ学系）

1. はじめに テル・ガーネム・アル＝アリのテル本体測量調査は長谷川らにより実施され、詳細な地形図が作成されている。今回の報告は、テル周辺の測量からテルの広がりを見極めることを試みた。

2. 地形測量 写真-1 にテル頂上から今回の調査で測量を行った北側を撮影した写真を示す。綿花や小麦の耕作地が広がっている。図-1 にテル北側の地形図を示す。地形図の A-B 測線の傾斜を図-2 に示す。テルから河川を中心へ向かって傾斜が継続していることが分かるが、地表は耕作が長い年月行われており、今回の測量だけではテルの延長なのか否かの結論を導くことはできなかった。

3. 今後の発掘調査 シリアの調査は継続が困難な状況であるが、今後調査が再開されるとすれば各種の調査方法が考えられ、最適な調査技術を導入する事を検討する。調査は政治情勢や地理的条件、地域に合わせた計測技術を選択することが重要である。松本健隊長が率いるヨルダン国、ウムカイス遺跡での調査手法をシリアにおける発掘調査に応用すべく考察を以下に行う。

具体的な調査手法を挙げると、調査対象地で最初に地中レーダーを用いることにより地下 2m 位の遺物、遺構を把握可能となり発掘地点の選定に威力を発揮する。

調査地点の地形図作成に当たり、自動追尾式のトータルステーションを使用することにより地形測量は格段に迅速かつ正確になる。例えば、視準を妨げる地物が無い広範囲な地形を想定し、自動追尾トータルステーションの3次元計測機能を使用するならば、従来の平板測量で地形図を作成する場合の100倍程度効率に差異がある。精度の面から見ても平板測量とは比較にならないほど緻密な測量が可能である。また、空撮を行うことにより精度の高い写真測量を行うことができ、オルソフォトを作成することによる広域な地形図を迅速に作製することが可能である。発掘が進行し、遺構や遺物を記録する際にもトータルステーションと写真測量は威力を発揮する。

4. まとめ 計測が迅速かつ正確に行われたとしても、どのような考古学的結果をもたらしたかが重要である。つまり、正確で詳しい計測を行った結果と従来の計測で行った結果と、成果はどうであったかを検討することが重要である。高価な先端機器を使用しても結果が最善とは限らず、従来の平板測量や遣り方が優位性を発揮する場合もある。発掘に要求される精度との兼ね合いが重要であり、高度な計測が行われたからと言って最良とは限らない。遺構や遺物の出土位置を mm 単位で把握する必要があるのか、無いのか、その正確な位置測定から新たな考古学的知見を得られるかが重要である。対費用効果を考えると高価な機器を使用する必要があるのか、検討する必要がある。



写真-1 テル頂上付近から北方向

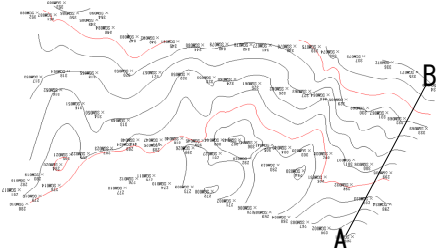


図-1 テル北側の地形図

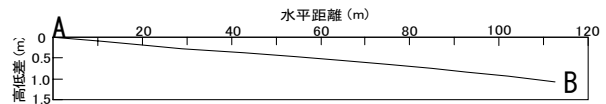


図-2 A-B 断面の傾斜